

密航・民族・ジェンダー

—— 在日朝鮮人文学にみる《人流》 ——

高 和 政

1. 一九七〇年前後の「在日朝鮮人文学」の出現

一九六〇年代後半から一九七〇年代はじめにかけて、金石範・金鶴泳・李恢成・高史明・金時鐘・鄭承博といった在日朝鮮人作家たちが数多く登場し、作品を発表し始め、その中のいくつかの作品は、日本社会でよく知られた「文学賞」を受賞することになる。

一九七〇年前後に、在日朝鮮人作家による文学作品が「在日朝鮮人文学」として日本社会において認定されるようになるといえるのだが、なぜこの時期に「在日朝鮮人文学」が集中的に表れたのか、ということは一つの大きな問題である。⁽¹⁾

この問いについては、様々な要因を指摘することができよう。まず、李孝徳が指摘するように、一九七〇年前後は、東アジアの状況が大きく変化していく時期であったことが挙げられる。在日朝鮮人にとってみれば、六五年の韓日条約によって朝鮮半島の分断状況は固定化されることになり、また五九年にはじまった朝鮮民主主義人民共和国（以下、共和国）への帰国事業が終息を迎えようとしていたこの時期、逆説的にも、自分たちが置かれていた状況がはっきりと見えてくるようになってきたといえるだろう。その結果、第二世代の在日朝鮮人作家たちは、自分たちの生を規定している「戦後」というものをようやく問うことができるようになり、この時期の作品において、解放後^{II}「戦後」からの問題が多く扱われることとなる。

一方、「日本文学」においては、当時はいわゆる「内向の世代」、すなわち「時代的な状況にたいして、文学としての自己の独自のイメージを、閉塞した日常生活と自我との内面にだけもっぱら追い求めようとする」と小田切秀雄によって評された作家たちが多く活躍する時期であった。そんな中で、在日朝鮮人作家たちは、「日本文学」の側から異なる存在として見出されることになる。「内向の世代」の命名者である小田切英雄は、一九七二年に発表した「内向の世代」と異質なもの」において、

これらの作家（在日朝鮮人作家たち——引用者注）が、前回にのべたような理由からして、ただ、内向にだけ自己を集中しているわけにゆかぬこと、自己の内面の切実なもの（私の存在の求めるもの）が、自己を現に重く規制し抑圧しているものとむきだしな鋭い緊張関係にあることを見ないではいられないこと、それが現代文学におけるのかれらの作品のまったく独自の性格をつくりだしていること、これらをのべることが私の主題であった。⁽²⁾

と述べ、在日朝鮮人作家の「異質」さを論じている。また、伊藤成彦も、

今日の日本の同世代文学は、解放された、近代的個人とは、砂漠の中に放りだされた羅針盤のない孤独な旅人のようなものだ、という自我観の上になり立っている。そして、今日の在日朝鮮人文学は、こういう自我観に対して、それがはたしてめざされた近代的自我であったのかという問いを暗黙のうちにつきつけている。⁽³⁾

と論じている。このような形で、ベトナム反戦や大学紛争などの、日本社会への「異議申し立て」を表す運動の中で、民族問題に対する認識の欠如が意識され、「在日朝鮮人文学とわれわれ」という形で、在日朝鮮人作家の文学をとらえようとする動き（『朝鮮ブーム』）が出てくるのである。

もう一点、本論との関連で指摘しておかなければならないのは、高度成長期にあって日本社会の状況が急速に変化していく中で、「日本文学」においても家族という問題が改めて問われていたということである。日本の平均的なサラリーマンの姿を描いた、核家族形成の物語ともいえる山口瞳『江分利満氏の優雅な生活』が一九六三年に直木賞を受賞し、続編の『江分利満氏の華麗な生活』とともに、以後多く読まれるようになる。また、小島信夫の『抱擁家族』を取り上げ、「近代産業社会」における「母」の崩壊、「母性の自己崩壊」を論じたのが江藤淳の『成熟と喪失』（一九六八年）であった。このような、高度成長期における家族の再編成が論じられている中であって、「在日朝鮮人文学」に描かれた家族の姿は、確実に「異質なもの」であったといえるだろう。

以上見てきたような様々な要因の中で、一九七〇年前後の日本社会において「他者」として可視化されていた「在日朝鮮人文学」について、戦後在日朝鮮人社会を考える上でも欠かすことの出来ない人流という問題を一つの切り口にして見ていきたいと思う。

2. 金達寿『密航者』分析

一九七〇年前後の「在日朝鮮人文学」について検討する前に、朝鮮半島と日本との間の人流を中心的に扱った先駆的作品といえる金達寿『密航者』を取り上げてみたい。一九五九年から雑誌連載され、一九六三年に刊行されたこの作品では⁴⁾、題名にある通り密航そのものをめぐる当時の政治的・社会的状況が描き出されており、七〇年前後に書かれることになる李恢成や金鶴泳らの作品と異なる側面を持っていることにも注目できる。

『密航者』は、林永俊と徐炳植の二人が乗った密航船が、日本の海上保安部に捕らえられ、九州のある港に上陸するところからはじまる。一九四六年の「十月人民抗争」以降にパルチザンとなった二人は、朝鮮戦争休戦後も小白山脈の山寺に身を隠していたが、生き残りもわずかとなり山から降りられない現状を打破しようと、「日本への脱出」を決意したのだ。その密航の動機は、徐炳植によって次のように明確に語られている。

おれたちは、日本からすぐに北へ渡るつもりでいるんだ。そしておれたちは社会主義の北へ行つて、この南をもそれで統一するために命をかけてたかうつもりなんだ。(『密航者』四〇ページ)

この作品における日本への密航とは、当初から「北へ渡る」ことを目指すためのものであり、明確な政治的意識に基づくものであった。密航船で捕らえられた二人であったが、取り調べが始まる直前、林永俊はスキをみて脱走し、なんとか「朝鮮人部落」にたどり着く。一方、逃げられなかった徐炳植は、大村収容所に収監され、二人は日本においてまったく異なる生活を送ることになるのである。

この物語においては、大村収容所内部の様子も描かれており、収容されている朝鮮人たちの姿も興味深い。「収容所というよりは刑務所といった方がふさわしい」という大村収容所についた当初から、徐炳植は「ふたたび南朝鮮へ帰る意思はない。もし送還するのだったら、必ず北へ帰すようにしてくれ」と収容所当局に要求しているが、その要求の背景となっている「強制送還をされれば、銃殺されるかも知れない」という認識については他の朝鮮人たちにも多く共有されており、徐炳植の考えがしだいに広まっていく。

大村収容所内で、徐炳植たちが「韓国」駐日代表部による送還審査を拒否したことをひとつのきっかけとして、「朝鮮民主主義人

民共和国帰国希望者自治会」が結成されたことや、その帰国希望者たちがハンストに入っていく様子も描かれている。作品中では、日本政府と李承晩政府との間に「日韓両国の抑留者相互釈放に関する了解覚書」が取り交わされ、抑留されていた日本人漁夫と引きかえに、強制送還が迫っていたことにも言及されており、またハンストも一九五八年六月二六日に大村収容所で実際に起きたものであった。⁵⁾ すなわち、現実の事態の経過に忠実に沿う形で、物語は進行していくのである。

このような『密航者』の性格は、『故国の人』（一九五四～一九五六年）や『朴達の裁判』（一九五八年）などの作品で解放後の民族抵抗運動や朝鮮戦争を題材とし、朝鮮半島と朝鮮人たちをとりまく歴史的経緯そのものを物語化してきた作者金達寿にとつての、当時の問題意識がそのまま表れたものと見ていいだろう。実際に、金達寿は「これは人道問題ではないか」（『番地のない部落』光書房、一九五九年。初出は『世界』一九五八年三月）という文章で、大村収容所収容者の強制送還と帰国希望の問題について述べている。

彼ら（大村収容所内の朝鮮民主主義人民共和国への帰国希望者——引用者注）をわれわれは一口に密入国者、密航者といっているけれども、私などは国際公法のことは何も知らないが、この彼らを政治亡命者とみるか避難民とみるか、あるいは単なる密航者とみるかによつて、日本政府にとつてはまったくその扱いがちがわなければならないことに注意しなければならない。

（中略）

今回の相互釈放の調印（「日韓両国の抑留者相互釈放に関する了解覚書」——引用者注）がそのとおりそのままに実行されて、南朝鮮・大韓民国へ強制送還となれば、彼らの運命はもうきまつたも同然である。同族どうし殺し合う戦争を忌避してきたものは、戦時脱走者として銃殺されるだろうし、その他のものは獄門につながれるであろう。⁶⁾

この文章において金達寿は、大村収容所の帰国希望者とは強制送還されればその命が危険にさらされることが明白な「政治的亡命者あるいは避難民」であるがゆえに、これは「はつきりとした人道上の問題」であると主張している。『密航者』における徐炳植の描かれ方にも、金達寿のこのような認識が色濃く反映していることが見て取れるだろう。

また、「彼ら千何百という全部のなかには、単なる密航者もあるにちがいない。私はそれをいっているのではないのだ」⁷⁾ と言っているように、当時の金達寿において、大村収容所内の密入国者のうち朝鮮戦争中の戦時脱走者や徴兵拒否者といった「政治的亡命者

あるいは「避難民」と、「単なる密航者」とが明確に区別されていることにも注目できる。『密航者』においても、繰り返し強制送還を経験し、「一日も早く送還されて南朝鮮へ帰ることしか考えていない」という「ポツタリ（かつぎ）屋の金方九」という人物が登場している。「ポツタリ（かつぎ）屋の金方九は別として、どの誰にしても自分の故郷・故国である南朝鮮のそこをすてて、命がけで密航してきたからには、みなそれぞれに切実な理由があったからである」（『密航者』、八四・八五ページ）という表現にみられるように、「単なる密航者」である金方九は、共和国への帰国へ向けたたかう徐炳植らの境遇と主張とを際立たせる役割を担っているといえるのである。

『番地のない部落』の「あとがき」（——「一九五九年四月」という日付が記されている——）において金達寿は、「在日朝鮮人の帰国のことがいわれている」として、朝鮮人がなぜ日本を離れて帰国しようとするのか、その理由を以下のように述べている。

第一に、日本では生活が立ちゆかないからである。一億に近い日本人がそれぞれに生活しているというのに、なぜ朝鮮人にはそれが立ちゆかないのか。それは、朝鮮人には民族的差別というものがおこなわれているからである。民族的差別＝生活苦、これである。

第二に、いまはむかしとちがって、これはまだ半分しかおよんではないけれども、朝鮮人にはかえるべき独立した祖国、しかも大建設のもと着実に発展している朝鮮民主主義人民共和国があるからであるが、しかし、在日朝鮮人の生活は、外面的にはいまもむかしも少しも変りはない。⁽⁸⁾

このように指摘する金達寿であるが、『密航者』で描かれる密航あるいは帰国希望は、「生活が立ちゆかない」といった理由からなされるものではなく、明確な政治的意識に基づいたものとしてあった。『密航者』の内容へ立ち戻ってみよう。日本への密航の際に徐炳植とともに捕らえられた後脱走し、朝鮮部落に逃げ込んだ林永俊は、日本で事業に成功した小学校時代の友人河成吉のもとに身を寄せるが、大村収容所での徐炳植のたたかいと在日朝鮮人たちの帰国運動を見て、「北朝鮮へ渡ろう」とする当初の意志を変える。

『よし、こんどはおれの番だ』——というのがそれです。とすれば、ほくは今日に生きる自覚的な一人の朝鮮人として、いま

は、のこされたもつとも困難な道をえらばなくてはならないのです。みじめな南朝鮮です。それを見ぬふりをすることはできないのです。

ぼくはさつきわれわれの望んでいる自由への道ということをいい、いま望んでいる最大のもの、わが国土の統一ということについて、それを北からつらぬくといいましたが、しかし一方また、北からばかりでなく、南からもそれをつらぬくものがなくてはなりません。ぼくはそこから追われてこうして逃げてきているものなのですが、しかしそれがなくてはなりません。ぼくは、その南へ帰る決心をしたのです(『密航者』、二二五・二二六ページ)

徐炳植たちや在日朝鮮人たちのたたかひの結果、「民主主義人民共和国・北朝鮮」への帰国ができるようになった今だからこそ、そのたたかひに「一つも手をかしてはいない」と考える林永俊は、「もつとも困難な道」として、「南朝鮮」への再度の密航を決意している。物語は、大村収容所から釈放され帰国第二次船で「北朝鮮」へと向かう徐炳植を新潟で見送り、その足で「南朝鮮」へと帰ろうとする林永俊の姿が描かれることによって、その幕を下ろしているのである。

以上のように見てみると、『密航者』における二人の主要人物である徐炳植と林永俊は、自分たちをとりまく朝鮮半島の分断状況の中であつて、いかにして政治的主体たりえるか、どのようにして朝鮮の現実に参加できるのか、という問いを常に持ち、その問いに答えようとして、密航あるいは帰国という方法を選び取っている、といえる。パルチザンの生き残りとして山寺に身を潜めている中で、林永俊は「おれはこんなにして生きていることをもつて、本当に生きているといえるであろうか」と考えるようになったことが日本への密航を決めた理由となっており、二人にとって密航は日本から共和国に渡って統一に向けてのたたかひに身を投じるためのものであつた。逃走に成功し、日本での生活を送っていた林永俊は、大村収容所でのたたかひや帰国運動に関わることができなかったために、自分が新たなたたかひの主体となりえるであろう「南朝鮮」への密航を決断しているのである。一人は「南朝鮮」へ、もう一方は「北朝鮮」へと再び国境を越える二人の姿には、分断という現実を巡る作者の認識が投影されているのである。

このように、金達寿によって、明確な政治的・社会的意識に基づくものとして描かれた人流であるが、一九七〇年前後に日本で注目を集めた「在日朝鮮人文学」においては、また別の形で描かれることになる。『密航者』における人流は、趙慶喜が濟州島の人々の密航について指摘したような、「自分たちの安全⇨安寧を確保するために領土の外に生活の拠り所を用意する」⁹⁾行為としてあるの

ではないのだ。大村収容所内での闘争や、帰国運動などが実際に進行していく中で書かれた『密航者』と、共和国への帰国事業が終わりを迎えようとしてつづつあった時期に書かれた李恢成や金鶴泳らの作品では、やはり事態の見え方が異なっていたのだろう。金達寿が『番地のない部落』の「あとがき」で言及しながらも、『密航者』においては表れていなかった、朝鮮人たちの「生活が立ちゆかない」ことと密航や帰国との関係が、七〇年前後の作品においては描かれることになる。

また、後の論との関係でいえば、『密航者』で強調される政治的主体とはやはり男性中心であり、ジェンダーをめぐる問題は浮上してこないという点も指摘しておきたい。

徐炳植の許嫁として登場する姜星喜は、いくら拒絶されても徐炳植の後を追って日本に渡り、大村収容所での釈放を待つて、ともに共和国へと帰国することになる。また、小学校時代の友人河成吉のもとに身を寄せていた林永俊は、その義妹である相川景子に思いを寄せるようになるが、「南朝鮮」へ渡ることを決意し、彼女にそれまでの思いを伝え、別れを告げる。しかし、物語の末尾、帰国船を見送ろうとする林永俊のもとに相川景子が突然あらわれ、「あなたがこちらへ向ってしたのとおなじように、こんどは、私が南朝鮮へ密航をするのです」と告げる。

容姿端麗な人物として描かれるこの二人の女性は、密航あるいは帰国という手段を通して朝鮮半島において主体たろうとする男性の判断と行動に、時には異をとねえながらも、最後まで付きしたがっていく。『密航者』には、たたかう男とそれを認め支える女という典型的な構図がみられ、ジェンダー関係の揺らぎはまったく見えてこないのである。

3. 人流／家族

一九七〇年前後に集中的に現れてきた「在日朝鮮人文学」においては、解放後に在日朝鮮人が余儀なくされた人流が様々な形で描かれている。人流そのものを中心的に扱ったものとしては、サハリンからの「引き揚げ」ならぬ密航経験を題材とする李恢成の作品がまず挙げられるが、帰国事業により共和国へ帰る語り手の妹の姿が描かれる金鶴泳の『錯迷』もここに加えることができる。七一年から七三年にかけて複数の雑誌に掲載され七四年に刊行された金石範『1945年夏』は、戦争末期から解放直後にかけての日本と朝鮮を往復する朝鮮人青年の軌跡をとらえているが、解放直後に日本から小さな漁船に乗り「独立祖国の首都ソウル」へ戻ったところで物語は閉じられている。また、中心的な題材ではないにしても、たとえば、高史明「夜がときの歩みを暗くするとき」の日本

共産党の方針に異議を唱える在日朝鮮人党員が密航者であるように、朝鮮半島への帰還・日本への密航・共和国へ帰国する人物の姿を多くの作品に見ることができる。

このように、多くの作品に程度の差はあれ人流が見られるのであるが、このことは、七〇年前後の「在日朝鮮人文学」が解放後の在日朝鮮人社会の状況を描いていることからすれば、ある意味で当然のことであるといえる。解放の時点で日本に二三〇万人を超える朝鮮人がいたが、一九四六年三月までに一四〇万人余りが朝鮮半島へ帰還している。しかし、その後の政治情勢の悪化と、日本政府による持ち帰り通貨と荷物の厳しい制限（通貨は千円以下、荷物は二五〇ポンド）も一つの要因となつて、本国での生活の基盤がなりたたないことにより、朝鮮戦争期に至るまで日本への再度の密航と強制送還が繰り返されることになる。⁽¹⁰⁾一九五九年からの帰国事業では、約九万人の在日朝鮮人が朝鮮民主主義人民共和国へと帰国している。このように、在日朝鮮人社会において人流とは、その文学に表れているように、至るところに見られた光景だったのであり、梶村秀樹が論じた「国境をまたぐ生活圏または生活意識空間」⁽¹¹⁾が、確かに存在していたのである。

また、人流とは家族との離別という経験そのものでもあったため、人流が書かれる際に、あわせて浮上してくるのが家族という問題である。李恢成の第一作である『またふたたびの道』には、この人流と家族という絡みあう問題が、最も特徴的に表れているといえよう。解放直後のサハリンからの密航経験と、義母の共和国への帰国という人流が描かれるこの作品は、同時に、当初「趙家の憂鬱」と題されていたことから明らかなように⁽¹²⁾、家・家族というものが問われたテキストである。

この物語の趙一家は、日本の偽造パスポートを手に入れ、日本人になりすますことで、朝鮮へ帰るために日本へ渡る。その際、祖父母や義母の連れ子はサハリンに残ることになる。日本へ渡る際に祖父母や義母の子と別れ、目的であった帰国も果たせなかつた父は、「一族で、祖国へ帰ること」をその後夢みることになる。

ここでは、戦後の在日朝鮮人にとつて、人流によつて離別すれば、その後の再会の見込みすら極めて薄いものであったという事実を指摘しておく必要があるだろう。植民地期において、日本「帝国」の版図が広がった分だけ朝鮮人の生活圏も拡大したのであるが、日本の敗戦と冷戦、そして南北の分断という条件によつて、国境という境界線が設定され、その生活圏自体が引き裂かれてしまったのである。そのため、人流自体が「不法行為」となり、一度越境すれば再度の越境は非常に困難であつたのだ。

このような状況を背景に、「在日朝鮮人文学」では人流とともに家族が問われるのであるが、そこに描かれた家族の姿は、よく指摘

されるように、荒れる父・耐える母・反発するあるいは沈黙する子、という構図によって特徴づけられるものであった。このような家族の姿こそ、「在日朝鮮人文学」が「異質なもの」として見出される要因の一つともなっていた。

例えば、金鶴泳や李恢成の作品には、しばしば粗暴な父親が登場してくる。母親はきまってその父親の粗暴に耐えている。そして作者の分身とおぼしき息子が、そういう母親をかばって父親と対立する——こうして父子の対立・相剋が生まれる。しかし、この父子対立は、たとえば、志賀直哉の文学における父子対立とは、本質的に異なる相を示している。⁽¹³⁾

このように、伊藤成彦は、「日本文学」の代表的な存在である志賀直哉の作品と比較する中で、金鶴泳および李恢成にみられる「粗暴な父親」の特徴をあげているのである。『またふたたびの道』における父親の姿を見てみよう。

家は哲午にとって西条のいう醜い世界として長年感じられていた。〈朝鮮人〉としての劣等感の家そのものの生活が植えつけたのかも知れない。怒鳴る父、ひっそりと手を拱ねている義母。この親達から逃れたいと哲午は思わずにはいられなかったのだ。家をトランク一つで出ようとすると、玄関口で父が哀れっぽくわめいた。

「おまえまで家を出ていくのか！」

すでに兄たちははてんで家を去っていた。振り返ってみると義母が玄関先に佇み、当惑したように哲午を呼んでいた。しかし哲午はそのまま遠ざかっていった。

「一族」での帰国を願っていた父は、同時に家庭内で「怒鳴る父」だった。そのために息子たちは「醜い世界」としての「家を出ていく」のであり、さらに「一族」は散り散りとなる。また、金鶴泳の作品には、苛烈な暴力をふるい続ける父と、それにじっと堪える母が繰り返して登場している。『錯迷』において、語り手である申淳一の妹は共和国へ帰るが、暴力の支配する「自分の暗い家にいたまればよかったため」に、家を出る手段として帰国を決意したのである。妹である明子の決断を受け、語り手の申淳一は次のように考えている。

どんなところにせよ、あの暗い家に生きることにくらべれば、まだまだではないか。家にいて、神経的に、精神的に虐げられることにくらべれば、いっそのこと一人でも北朝鮮にかえって、そこで伸び伸びと生きた方が、ずっと幸福ではないか。(中略) 帰国の意志があるのなら、帰国した方がいいのだ。

父の暴力に支配された「暗い家」で生きることと共和国への帰国が秤にかけられ、どちらが「自分たちの安全⇨安寧を確保する」(趙慶喜) ことができるのか、という選択において帰国が選り取られている。家と人流という問題を、別の形でここにも見ることができらるだろう。

また、家庭内の抑圧の要因として描かれるのは、父の直接的な暴力だけではないことにも、注意する必要がある。「またふたたびの道」において、父の死後、義母が再婚したいという意志を明らかにすると、子どもたちは義母が家を出ることに対し露骨な反発を示し、「趙家のオモニ」として家にとどまるよう要求している。息子たちの家への意識が、義母という一人の女性を、あくまでも〈母〉の立場に押し込めようとするのだ。結局、義母は家を出、共和国に帰ることになるのだが、家の存続のために〈母〉を犠牲しようとする息子たちの思いが、ここには描き出されているのである。⁽¹⁴⁾

このような、文学にも描かれた在日朝鮮人社会の強固な家父長制、性差別性は、八〇年代以降、厳しく批判されることになる。

だが、父の母に対する横暴ぶりは、ほとんど変わらなかった。父は、S同盟の分会長として、日本政府の在日朝鮮人に対する抑圧政策を攻撃することは知っていても、自分自身が妻や子供に加えている、直接間接の抑圧については、いっこう反省する気がなかった。子供たちが真に望んでいるもの、それは「祖国の平和的統一」というよりは、むしろまず「家庭の平和的統一」なのだということを、父は依然として理解しなかった。

鄭映恵は、『錯迷』のこの箇所を引きながら、「一世のハルモニたちの苦悩に満ちた生活は、日本帝国主義によるものであったと同時に、自分の夫によるものであった」とし、以下のように述べている。

「在日朝鮮人」一世の男たちは、日本社会から受けた抑圧を、そのまま自分の妻や子どもたちに振り向けてきた。そのため、「在日朝鮮人」の女性や「子ども」(二世たち)にとつての〈解放〉とは、日本社会にはびこる民族差別からの〈解放〉と共に、暴君(父)によつて支配されてきた〈家〉や〈民族〉からの解放も意味した。家や民族を相対化し、それらのもつ自明性を少なからず打破すること、それが必要だった(傍点原文)。(15)

それまでの在日朝鮮人の解放をめざす運動は、それぞれの家庭での女性や子どもに対する「暴君(父)」の暴力を見過ごしてしまつたのであり、「〈家〉や〈民族〉」は抑圧として機能してきてしまつた。そこからの解放が、日本社会の民族差別からの解放と「共に」、必要であつた、とされているのである。

また、朴和美は、「在日社会」において民族差別と階級差別の重層性はそれなりに理解されながらもジェンダーの問題が認識されてこなかつたことを指摘し、「二重、三重の差別構造を、いまという時代に照らし合わせて同時進行形で解決していこうとする覚悟が在日には求められている」と主張する。(16)金伊佐子は、在日朝鮮人女性の主体的な解放運動の始まりを宣言する文章において、次のように述べている。

何よりも在日女性、在日社会と一言で括れない最大要因である祖国分断は有形無形、あらゆる形で在日の女を細分化する。祖国分断を固定し搾取支配しようとする日本で、細分化された女たちは思うままに搾取支配され、抜本解決よりも応急措置に追われ、その場その場を何とか切り抜ける。その繰り返しが女たちにあらゆる窮場をしのぐ力をもたせ、その様子を見た日本人は在日の女を「たくましい」と感嘆称賛する。日本人だけでなく、在日の男たちもまた「たくましい」在日の女を誇りに思い、なぜたくましくなったのかについてはひたすら日本の帝国軍国主義、支配侵略主義、差別抑圧主義にのみ原因を見いだし、自らの加害性など思いもしない。(中略)

在日であることと、女であることは私にとって別のものではない。そのいずれか一方のみを共有することで理解し合えると思ふほどお人好しでない。民族問題で女「性」を無化する在日の男も、女性問題で民族「性」を無化する日本の女も、在日の女には支配と抑圧の加害者である。(17)

「女性」であるということと、在日朝鮮人であるという「民族性」。どちらか一方だけを重視することは、「在日の女には支配と抑圧」に他ならない、と金伊佐子は断じている。在日朝鮮人女性をとりまく「重層的な差別構造」を意識化した上で、それを克服していこうとする「在日女性の解放運動」が必要であると強調しているのである。

「いまという時代」において、人流と家族という視点から「在日朝鮮人文学」を検討する際には、このような「重層的な差別構造」がどのような形で形成されているのかを見なければならぬ。在日朝鮮人の生を規定してきた国家・民族・ジェンダー・階級といった問題を、順列づけることなく複合的な視座から「共に」「同時進行形で」問うという姿勢が必要となるのである。⁽¹⁸⁾以下、この問題意識に基づき、具体的に作品を検討していく。

4. 李恢成・金鶴泳の小説に描かれた、生活／帰国／暴力

人流が家族を強く意識させ、一方でその家族のありようこそが家族を離れさせ、さらなる人流を招くという事態。このことを考えるためには、戦後日本社会で在日朝鮮人がおかれた社会的・経済的状况を見る必要がある。

サハリンから日本に渡った後の北海道での生活を描いた李恢成『人面の大岩』には、次のような一節がある。

生活をかけて父がはじめた仕事というのは養豚業であった。(中略)

父がうらめしかった。なんでこんな汚い仕事をぼくがしなくてはいけないのだろう。畑仕事の方がよいと思ったし、できればそのどちらもしたくなかった。小学生のぼくはほかの少年たちのように学校からもどると日暮れまで草野球をしていたかったのだ。カーキー色のボーイ・スカウトの制服を着てキャンプにも参加したかった。その頃、ボーイ・スカウトの格好をした少年はへんにチャラチャラしたところがあり、僕は内心では軽蔑していたが、豚のエサをあつめるよりはずっと楽しそうに思われた。

そろそろ、ませてきていたのだ。だから、あまり見ばえのしない家の手伝いなどはしたくなかったのである。しかし、父の命令にそむくことはできなかった。母がいつしよにリヤカーを引いてくれた。

植民地期炭坑夫であった父が、戦後なかなか仕事につけず、「生活をかけて」養豚業をはじめ、家族ぐるみでその仕事を支える姿

が見て取れる。金鶴泳の『弾性限界』にも次のような場面がある。

その住吉町の家の物置小屋で、玄の父の高木宗遠こと高宗遠は、七年間酒の密造をやっていた。濁酒から清酒を蒸留するとき
は、朝の三時に起きて、釜に火をつけた。その火勢を一定に保つのが玄の役目になっていた。そのとき、玄はまだ小学生であつた。そして、中学生の終りになるまで、その役目は変わらなかつた。

この物語の高宗遠は、戦後「屑屋」・「屋台のオデン屋」・「養豚業者」・「進駐軍の放出品の闇ブローカー」といった職業を経て、「酒の密造」をおこなうことになり、その労働の一端を家族が担うことになる。五〇年代、在日朝鮮人の完全失業率が日本の八倍という中で、家族の結びつきのもと、その補助労働が生活を支えていたのである。⁽¹⁹⁾ 家族が結束して生活せざるを得ない中、その家庭は「父の命令」による抑圧を生む場であり、かつ公権力に対する抵抗の足場でもあつた。金鶴泳『鑿』の中で、警察と税務職員の家宅搜索を受けた際、「酒を造っていたのはあたしだ、あたしを連れてつとくれ！」と髪を振り乱しながら喚く母の姿は、宋連玉が「私的領域を侵そうとする公的な領域、国家の暴圧に向かって在日朝鮮人男女は共闘して生活を守った。しかし言うまでもないが、対等な関係での共闘ではない」といった、その「共闘」そのものである。⁽²⁰⁾

先の『人面の大岩』の引用文にもよく表れているが、日本社会の中で、このような生活をする事自体が、子どもたちにとっては、家に対する嫌悪感をつのらせていくことに直結する。

豚の生活だ！ぼくは身ぶるいしながら、心の中で叫んだ。豚はエサが少ないと不満をならす。エサをあたえないと、甲高い悲鳴をあげる。そのように父は不満を漏らし、怒鳴っているのではないか。しかも、家人は豚以下なのだ。不満のはけ口がないいま、黙々と暮らすより仕方がないのだ。

生活のために、力によって家族をつなぎとめようとする父への不満はたまる一方となり、子は家から離れることを望むようになる。このようなかたちで、子の世代が家あるいは父に対して持つ強い嫌悪感を、竹田青嗣は『在日の根拠』の中で「不遇の意識」と

呼び、「（在日）とはむしろなにより、とり返し、のつかない不遇性を生きることだ（傍点原文）」と述べている。⁽²¹⁾しかし、「とり返しがつかない」と結論づける前に、そのような「不遇の意識」が形成される条件あるいは構造をきちんと見据える必要があるだろう。

ここで、金鶴泳『錯迷』の語り手である申淳一の妹明子が、共和国へ帰国する場面を見てみたい。

そのとき、甲板の上の明子の表情が、さっと変わった。それまで静かに無表情だった明子の顔に、急に動揺の色が走った。まるで自分はいま母や家族から一人離れ、見知らぬ土地に行こうとしているのだということ、はじめて真に悟ったかのごとく、私になじみの深いあの怯えの表情がにわかには明子の顔に浮かんだ。すると、もはや母のことを「オモニ」と呼ぶようになっていたはずの明子が、突然、以前の明子に立ち返って、こう呼びはじめた。

「お母さん！お母さん！」

明子は上半身を舷の外に乗り出し、蒼ざめた顔で、うめくような声で叫んだ。

「明子！明子！」

（中略）

「お母さん！お母さん！」

涙をポロポロ流しながら、明子をはらわたに沁みる鋭い声で何度もそう叫んだ。船が急ピッチで岸壁を離れて行く。人の群れはいっそうどよめき、叫び合う声はいっそう鋭くなつて行き、泣き叫ぶ声があちこちから聞えてくる。ふっと熱いものが私の胸にこみ上げてくる。涙が溢れ、視界が曇る。（どうしたことか。これはどうしたことか）そんなことを呟いているうちに、涙は抑えようもなくつぎつぎに溢れてきて、頬を伝って行く。

前述したように、明子は「自分の暗い家にいたたまれなかったため」帰国するのであるが、しかし船が離れるというまさにその時に、家族というものがこれ以上なく強く意識されるのである。竹田はこの場面を取り上げ、「つまり明子はこのとき、自分が原感情としての自己の〈不遇性〉から、『祖国』あるいは『帰国事業』という物語のほうへ飛び移ろうとしていたことに突然気づき、そのため『オモニ』といういわば物語化された呼称を捨てて、『お母さん』という原感情の方へ駆け戻ろうとするのだ」としているが⁽²²⁾、ここで

は、家を離れるという目的のために共和国への帰国を選びとられているという問題と、この場面に描かれた経験の上でも、三年後に次の妹も帰ったこと、あるいは帰らざるをえなかったという事実について考える必要がある。このような帰国は、宋連玉のいう「前近代の家族の抑圧から合法的に逃避する限られた道」としての選択だったと考えられるが⁽²³⁾、それは同時に、在日朝鮮人女性にとって家を出て日本社会で生活していくことが非常に困難であったことをうかがわせる。

この問題についても、複合的な視座から考える必要がある。金鶴泳の作品にはたびたび、大学を出ても日本社会で職を得ることができない人物（男性）が登場している。晩年の作品である「空白の人」は、在日朝鮮人に対する就職差別そのものを題材とする小説である。このような、大学を出て専門知識を身につけても就職差別の厚い壁に阻まれるという日本社会の現実に対して、ジェンダーバイアスがさらに加わることで、在日朝鮮人家庭において女性に高等教育を受けさせないということが一般化してしまったといえるだろう⁽²⁴⁾。

一方、共和国への帰国という人流については、帰国運動のただ中で書かれた金達寿『密航者』とは大きく異なり、明確な意味づけができないものとして作品内におかれていることに注目できる。先に見た『錯迷』にあるように、帰国するという決断に関しては、このまま日本社会で生きることと比較する形で、やむをえないことであるという認識をみることができた。帰国事業の進展にとまいない、一人でも多くの在日朝鮮人を共和国へと「追放」しようとするかのように、厚生省が在日朝鮮人への生活保護費の削減のための取り締まりを強化していたこと⁽²⁵⁾が具体的に広く知られていたとはいえないが、金達寿が指摘していたような「民族的差別＝生活苦」のために「日本では生活が立ちゆかない」ことは、「国民」以外を排除する劣悪な社会福祉の状態とあわせて、多くの在日朝鮮人に実感として広く共有されていたといえるだろう。しかし、帰国運動が実質的に終わりを迎えようとしていた時期に書かれた『錯迷』や李恢成『またふたたびの道』には、帰国をどのようにとらえたらよいのか、その迷いも同時に見ることができている。

『錯迷』では、明子が帰国する場面は丁寧な描かれていたのに対し、その三年後に次の妹である紀子も帰国したことに関しては、事実の報告しかない。語り手の申淳一は、「この九年のあいだに私の家に起きた最大の出来事といえば、それは明子と紀子の北朝鮮帰国であった」としているのだが、帰国後の二人の妹の様子については、一切言及がないのである。

李恢成『またふたたびの道』は、義母が共和国への帰国するということを知らせる手紙が趙哲午のもとに届くところから物語が始まっている。しかし、哲午は、その手紙をどうしても読むことができない。義母が帰国を決めたことに思いをめぐらすことから、哲

午の過去の密航や家族の経験への回想がはじまっていくのである。

仕方なく、哲午はタバコを吸った。何気なく目を閉じたとき、義母のけうといまなぎしが浮んだ。(そうか。帰国するのか……)心のなかで呟いていた。そのときから哲午の脳裡に海が拡がってきた。おぼろな海であった。その海のかなたに幻の島がかすんでいた。タタール海峡に沿って、蟹のはさみのように伸びている樺太。その海と島がいま哲午の心にかぎりなく近づいてきていた。

その憶い出のなかから、一人の少年が抜け出していた。

義母の帰国という越境の決断を前にして、哲午の脳裡に、樺太からの密航という過去の越境の経験が浮かびあがっていく。その中から、これまでの「趙家」家族のありようが振り返られるのだが、義母が帰国すること自体については、最後まで哲午は自分の中でうまく位置づけることができない。

「いまでもおれはオモニに裏切られたと思っている。この感情はいつまでもなくならぬだろう。そんな気がするのだ。……でも、不思議な気もする。何かほっとする気もあるんだな。親父はあれほど帰国しようとして果たせなかった。祖父達にしてもふたたび祖国へ帰れるのはいつのことだろう。そのかわりにまずオモニが帰っていくのかも知れない。趙家のオモニとしてじゃなければ、趙家の人生を送ってきた人として……。そう考えると、何かそれも趙家のひとつの真実なのだと思えてくる……」

再婚した夫の病気のため、「日本においては健康保険もないし金ばかりかかるので思い切って帰ることにした」という義母の選択を、哲午は「趙家のひとつの真実」として何とかとらえようとしているが、物語の末尾において、結局自分自身を納得させることができないと示唆される。帰国する義母を「仕方ないから」送りにいくため、新潟に向かう列車に「なにか怒ってでもいるように大股で近づいてきた」哲午の姿が描かれて、物語は幕を閉じるのである。

帰国事業が実質的に終わりを迎えた後に書かれた『錯迷』と『またふたたびの道』であるが、登場人物による帰国という選択を、

やむをえないこととしながらも、肯定的にも否定的にも意味づけてはおらず、あるいは評価することもできていない。評価を避けている、というより、どうとらえたらよいかかわらないという戸惑いだけが際立つのである。

このことについては、当時から現在にいたるまで、日本社会においては共和国への帰国という人流を意味づける場自体が存在していない、ということを考える必要がある。在日朝鮮人という「破壊分子で社会福祉の重荷と思われる人たちをこの国から排除したい、と考えた」⁽²⁶⁾ 日本政府の姿勢により、共和国へ帰国した人々は、その後日本に再び来ることは許されなかった。一九六三年以降、様々な形で「祖国往來の自由」を求める運動がなされたのだが、それらの自由往來運動は韓日会談を阻止するための政治的目的により行われているものだとして、日本政府は共和国との往來を認めなかったのである。⁽²⁷⁾ そしてこの状況は、日本と共和国の国交がないまま解放後Ⅱ「戦後」七〇年を迎えた現在に至るまで、基本的には変化がない。すなわち、共和国へ帰国した人々の声を、それとして聞くことができない状況が、六〇年代から現在まで続いてしまっているのだ。聞こえてくるのは、日本社会の欲望に適合的な、「北朝鮮の惨状」を伝えるとする声ばかりなのである。

現在の日本における官民一体となった「北朝鮮敵視」体制を考えると、「人道」の名のもとに行われた共和国への帰国が、当事者にとつてどのような経験だったのか、正確にとらえることができない状態のままにあることがわかる。『錯迷』や『またふたたびの道』で描かれたその状態は、現在も変わりがないのである。このことはまさしく、植民地主義の克服がいまだなされていない、なにより証左といえるだろう。

次に、子に家庭への嫌悪感を募らせ、新たな人流を招くことになる、あの父の暴力という問題を考えてみたい。金鶴泳『あるこゝるらんぶ』に登場する洪仁舜は、植民地期、強制連行された北海道の炭坑での経験を次のように語っている。

そこはもう監獄だな。いや監獄よりもひどえところだった。明けても暮れてもテンノウヘイカ、テンノウヘイカだった。炭坑の穴にひとりひとり下げるとき、いちいちこういわせるんだ。

『ヒトウツ！我等ハ皇国臣民ナリ、忠誠以テ君国ニ報ゼン！』

ヒトウツ！我等皇国臣民ハ互ニ信愛協力シ、以テ団結ヲ固クセン！

ヒトウツ！我等皇国臣民ハ忍苦鍛錬ヲ養ヒ、以テ皇道を宣揚セン！」

途中でつかえたりすると、ひでえ目に合わされる。そんな根性だから成績上がらんだとかいって、半殺しにされる。死んだ気持ちにでもならなけりゃあ、まず辛抱できねえところだ。あんときは日本人も人間並みに扱われなかったが、朝鮮人は犬畜生以下だった。

この洪仁舜は、金鶴泳作品によく描かれる横暴な父の一人であるが、その人物がかつて「皇国臣民の誓詞」を暗唱することを強制され、そのために苛烈な暴力を受けた経験を語っている。この洪仁舜のありようには、日帝下で強いられた暴力が、解放後にも植民地期に形成された日本人と朝鮮人との価値序列構造がそのまま残存する中で、それ対抗し、朝鮮人として強くあらねばならない、という形で、家族に対して転化していくという構図がよく表れているといえるだろう。戦後、まがりなりにも男性のみに存在した選挙権も剥奪され、無権利状態で日本で生活する中で生ずる政治的「主体」となることへの欲望が、朝鮮人としてあることという意識を強化させ、その意識にそった行動を家庭内にも求めていくのである。

このような形で強まる民族意識は、分断体制の中で南北いずれかの国家の政治的「主体」たろうとする中で、分断国家の論理を前提にした排他的国民主義の形をとることになる。そして、南北双方とも、分断国民国家は性差別を軸に再編強化する論理を有していたことから、日本社会の中で、南北の分断国民国家のその論理のぶつかり合う場となる在日朝鮮人社会は、厳しいジェンダー規範によつて規定される場でもあったのである。

このような、一つの家庭の中にあつても、「民族」という名のもとに排他的国民主義が強要され、時としてその国民主義同士がぶつかり合う状況に対する違和感を、金鶴泳は描いたといつてもいいだろう。それはまさしく、在日朝鮮人であるがゆえに抱くこととなる違和感であり、苦悩なのである。

以上のように、李恢成と金鶴泳の作品を家と人流という視点から読み返してみると、そこには、排外的で差別的な日本社会の中で、在日朝鮮人家庭に離散していく方向への力が不断に働いていると同時に、その家族を形成・維持しなければ生活していくことができなかつたという構造を見出すことができる。そしてその構造のために、女性を犠牲にした上で成り立つ、家父長制が強固なものとなることを指摘できるだろう。だとすれば、在日朝鮮人の家父長制は、よく言われるような前近代あるいは封建的なもの残

存としてではなく、植民地主義が克服されることなく継続する中で強固なものとなるといえるのではないか。

4. 結びに代えて

最後に、李恢成『人面の大岩』の末尾の場面を取り上げたい。

長いこと、ぼくには父の背後にある不気味な坑道が何なのかよくわからなかった。その薄暗さは父の狂暴さを育てるものもの道に通じているようにうつつだった。そのため、父が腹を立てると、そこにどんな真実がこめられていようと、ぼくにはけものことはととしてしか聞こえなかったのである。

この頃になって、その坑道に光がほのかに射しこんでくるように思われる。ひよつとして、自分が朝鮮人として父のことはを理解しようとしているせいかなと考えてみる。もしもそうなら、ぼくはうかつにも父を見くびりすぎてきたのだ。

李恢成や金鶴泳の作品には、家庭内の父の横暴を描いたものが多く見られるが、同時に、この引用文のような、暴力をふるった父を、子が理解するという場面も見ることができる。⁽²⁸⁾しかし、このような父に対する理解には、あくまで「男」の子、すなわち息子の視点からのみ描かれていることもあり、女性に対する抑圧の結果として見過ごしてしまうという側面が抜き難く存在していた。⁽²⁹⁾本稿は、力を誇示する父のみを理解し免罪するのではなく、米山リサが指摘する、「主体を様々な権力関係の交錯する場として複合的にとらえる」試みだった。⁽³⁰⁾このような、国家・民族・ジェンダー・階級といった「様々な権力関係の交錯」する網の目にそれぞれの主体を配置し、そこから支配と従属の関係を可能にしていくのが植民地主義の一つの特徴といえるだろう。だとするならば、「様々な権力関係」がどのように「交錯」し、どのように相互に規定しあって構築されているのか、その交差性を明らかにしていくことが、植民地主義を何とかして克服していくために、まず必要不可欠であると考えている。

【注】

- (1) 李孝徳「ポストコロニアルの政治と『在日』文学」、『現代思想臨時増刊 戦後東アジアとアメリカの存在』（青土社、二〇〇一年七月）、一五七ページ。
- (2) 小田切秀雄「内向の世代」と異質なもの」、『文学的立場』日本近代文学研究所、一九七二年一月・七月。引用は七月、一九ページ。
- (3) 伊藤成彦「在日朝鮮人文学とわれわれ」、『文学的立場』、一九七二年七月、三六ページ。
- (4) 金達寿「密航者」は、一九五九〜一九六三年に『リアリズム』および『現実と文学』に連載され、一九六三年に筑摩書房より刊行された。以下の『密航者』からの引用は、筑摩書房、一九六三年からのもの。
- (5) 朴正鎮「北朝鮮にとって『帰国事業』とは何だったのか」、高崎宗司・朴正鎮編『帰国運動とは何だったのか』（平凡社、二〇〇五年）、一九四ページ。
- (6) 金達寿「番地のない部落」光書房、一九五九年、二七七〜二七九ページ。
- (7) 同書、二七八ページ。
- (8) 同書、二八〇ページ。
- (9) 趙慶喜「불안정한 영토 밖의 일상」、『주권의 야만 밀항, 수용소, 재일조선인』(한울, 二〇一七年)、一五四ページ。
- (10) 姜在彦「『在日』百年の歴史」、『環』一一号（藤原書店、二〇〇二年一〇月）参照。
- (11) 梶村秀樹「定住外国人としての在日朝鮮人」、『梶村秀樹著作集』六卷（明石書店、一九九一年）、一八ページ。
- (12) 李恢成「著者から読者へ どうかわが故郷を訪ねてほしい」、『またふたたびの道・砧をうつ女』（講談社文芸文庫、一九九一年）、所収。
- (13) 伊藤、前掲論文、二五ページ。
- (14) 『またふたたびの道』において見られる、息子たちが義母を理解しようとせず、家のために〈母〉でありつづけさせようとするこの暴力性への視点は、金子氏の指摘による。記して感謝にかえたい。
- (15) 鄭映恵「〈家〉の解放と開かれる〈民族〉」、『解放社会学研究Ⅰ』（明石書店、一九八六年）。および鄭映恵「民が代」斉唱』（岩波書店、二〇〇三年）、一三三ページ。
- (16) 朴和美「怒ってくれてありがとう——在日の女と男」、『ほるもん文化』九号（新幹社、二〇〇〇年九月）。
- (17) 金伊佐子「在日女性と解放運動——その創世期に——」、『リブとフェミニズム』（岩波書店、一九九四年）、所収、二四七〜二四八ページ。初出は『フェミニズム』3（玄文社、一九九二年）。
- (18) 宋連玉「在日朝鮮人女性とは誰か」、シンポジウム「ポストコロニアル状況の中の在日朝鮮人」資料集、二〇〇三年二月。
- (19) 宋連玉「『在日』女性の戦後史」、『環』一一号（藤原書店、二〇〇二年一〇月）、一七〇ページ。
- (20) 宋「在日朝鮮人女性とは誰か」。

- (21) 竹田青嗣『在日という根拠』（ちくま学芸文庫、一九九五年）、二四一ページ。
- (22) 竹田、同書、一九一ページ。
- (23) 宋「在日朝鮮人女性とは誰か」。
- (24) 朴裕河は、「女性には花嫁修行のために民族学校に行かせ、ついでに高校どまりにしておいたという教育において、『戦後』在日社会は韓国社会よりもはるかに男性中心社会であった」（一九六〇年代における文学の再編）、『思想』二〇〇三年一月、一一九ページ）と述べているが、日本社会のなかで在日朝鮮人がどのような状況におかれていたのか、という点を考慮にいれず、教育の面だけをとりあげて、「男性中心」性をはかっていることには、強い疑問を覚える。
- (25) テッサ・モリス——スズキ『北朝鮮へのエクソダス』（朝日新聞社、二〇〇七年）、一四八―一五一ページ。
- (26) 同書、二五六ページ。
- (27) 李尚珍「日朝協会の性格と役割」、高崎・朴正鎮編前掲書、二六一―二六四ページ。朴正鎮「日韓国交正常化と日朝関係の非正常化」、高崎・朴正鎮編前掲書、三四八―三四九ページ、参照。
- (28) 金鶴泳の作品では、例えば『錯迷』や『鑿』に、こういったかたちでの息子による父への理解が描かれている。
- (29) たとえば、李正子の短歌・随筆には、父に対して幼い頃より抱いてきた二律背反する感情の中から、歴史的背景や自分たちがおかれてきた社会経済的状况をふまえて、父のかつての言動を読みとつていこうとする運動がみられる。まさに「複合的」に父の経験・思いをとらえなおしていくというその試みは、抑圧・暴力を免罪するものとは異なる、また別の理解のあり方へ向かうものだといえる。李正子『鳳仙花のうた』（影書房、二〇〇三年）、参照。
- (30) 米山リサ「批判的フェミニズムの系譜からみる日本占領」、『思想』二〇〇三年十一月、七九ページ。

※本稿は、韓国で刊行された『주권의 야만 밀항, 수용소, 재일조선인』（聖公会大学東アジア研究所企画、한울、二〇一七年）に収録された論文の日本語原稿である。『継続する植民地主義』（青弓社、二〇〇五年）に収録された同名論文を基にしているが、大幅に加筆・修正をしている。